

当院における胚移送の現状と今後の課題

柴田 美智子¹、中野 達也¹、中岡 義晴¹、森本 義晴²

医療法人三慧会 ¹IVF なんばクリニック、²HORAC グランフロント大阪クリニック

【目的】

胚移送は凍結胚を施設間で移動させる事で転院後も治療を継続できる重要な仕組みとなっている。その一方で輸送中の安全性や実務の標準化など課題も多く、移送後の胚の成績についても不明点が多い。今回は当院の移送システムの現状と転院後の予後を追跡したので報告する。

【方法】

2016 年 5 月から 2025 年 6 月までに当院が他院より受け入れた胚移送 148 件(333 個)を対象とし、移動距離、凍結デバイスの種類による生存率を検討した。移動距離は当院所在が大阪のため府内と府外で、デバイスは当院で採用している Cryotop とそれ以外で検討を行った。また、実際に胚移植を行った症例について妊娠転帰を調査した。

【結果】

移動距離における生存率は府内(180/182 個)と府外(146/151 個)で差を認めなかった。(98.9%vs96.7%)。さらに、デバイス別では Cryotop(303/306 個)が他デバイス(23/27 個)と比較し有意に良好であった(99.0%vs85.2%, $p<0.01$)。移送胚で移植を行った症例は 120 名で妊娠判定陽性は 67 名(妊娠率 55.8%)であった。府内と府外で妊娠率に差はなかった(50.0%vs63.5%)。また、Cryotop と他デバイスで妊娠率に差はなかった(56.4%vs44.4%)。

【結論】

今回の検討で、胚移送は距離に依存せず生存性を維持できることが確認された。しかし、デバイスの種類による影響は大きく、Cryotop が安定した成績を示した。また、府外からの移送は転居に伴う例が多く、府内では新技術の導入希望や前医との方針の不一致など多いと考えられたが、妊娠転帰に差は無くどちらも安定した成績を保っていた。これにより、移送自体が大きな障害となる事は少なく患者にとって不可欠なシステムであると思われる。しかし、個人で輸送する場合の安全性や保険治療歴の正確な引継ぎなど課題は多く、今後もより詳しい検討を進めていく必要がある。